

行脚修行を通して伝わる 「神仏の慈悲」

『2月19日(金)』

三重県『伊勢市駅』を出発し、約1時間40分かけて奈良県は「長谷寺駅」に到着。

『長谷寺』と言えば、真言宗豊山派(ぶざんは)の総本山で、本堂にお祀りされているのは「十一面観音様」です。

さて、そんな『長谷寺』の下町は、昔ながらの景観を保っている?まさに田舎町で、商店街の町並みもシャッターが下りている店が多く、例えて真成寺町の光景を連想させる様な(笑)、いやそれ以上の閑散とした光景を呈していた。

そんな町並みを、お題目(南無妙法蓮華経)を唱えながら通り抜け、『長谷寺』の山門受付に到着すると、その受付前で歩む足が止まった。そこには古めかしくも立派で、真つ黒な八咫鳥(ヤタガラス)が、私を含む一般参拝者をお迎え下さっていました。その八咫鳥の前に立ち、正対していると、耳鳴りが始まり、

強い御霊験(灵力)を感じた。次の瞬間、自然に口をついてお経を唱え始めていた。お経を唱えていると、流れている時間が止まったかの様な心地よい精神状態になっていくのが分かった。

懇(ねんご)ろにご挨拶を終え、いよいよ『長谷寺』の参道に到達した時、目の前に現れたのが、真つ直ぐ延びる299段の長い回廊だった。1度大きな深呼吸をし、ユックリお題目を唱えながら、1歩1歩回廊を踏みしめ上がりはじめた。すると、ちょうど回廊の中間地点に、「蔵王権現(ざおうごんげん)」が祀られている『蔵王堂』や、「不動明王(ふどうみょうおう)」が祀られている『不動堂』などを発見。その各お堂の前でお参りをし、残りの長い回廊を上りきると、長谷寺の境内に到達した。

左手には「十一面観音様」が祀られている本堂。左手奥には百体以上の『水子地藏様』が祀られている参道が目に見えていた。まず右手奥に安置されている『水子地藏様』1体1体の前で、お線香を供え、『お自我偈』やお題目を唱えさせてもらいながら、一番奥のお堂に到着した。そのお堂には『お地藏様』と、「不動明王様」が祀られていた。お堂を護っておられる受

付の方に声をかけ、お堂内の香炉に線香を供えて頂き、お堂前にて『お題目』を心ゆくまで唱えさせてもらった。

そして再び『水子地藏様』の参道を通り抜け、まさに圧巻「十一面観音様」が祀られている本堂へ…。

本堂前に到達した私は、目を疑うくらい素晴らしい、それはそれは大きな神々しい「十一面観音様」に、しばしの間…目も心も奪われた。「十一面観音様」は、今まさに動き出されんが如く、語り出されんが如く堂々と、そのお姿を顕しておられた。有り難さのあまり、またユックリ『観世音菩薩品第二五』と読経を始めた。

「檀家さん、信者さんの平和 家族の平和 日本国民の平和 世界平和」と、心ゆくまで読経させて頂いた後、長谷寺歴代住職の墓石前で供養のお経を唱えさせて頂いた。長谷寺の閉寺の時間を迎え、お寺を後にした。

『2月20日(土)』
明るく朝、7時から始まる『長谷寺』の朝勤に参拝すべく、6時に起床した。今朝は、魚津を出発してから初の雨模様となる。長谷寺に到着してみると、ちょうど雲水達(修行者)が長い階段(299段の回廊)を、規則正しく1段1段お堂に向けて歩を進める

場面に遭遇した。雲水達総勢150名くらいでしょうか、私が「おはようございま〜す!」と声を掛けると、一斉に「おはようございま〜す!」との挨拶が返ってきた。気持ちの良い空気が流れた。お互いに挨拶を交わすと、私はその行列の最後尾につき、追いかける様に回廊の歩を進めた。

お堂の前に到着する頃には、いつの間にか雨も止んでおり、曇り空の下、霞(かすみ)がかかった境内地から、下界を眺めてみると、それはまさに御曼荼羅の様な、神仏の世界が顕現したかの様な、荘厳な光景が広がっていた。

そんな、時間が止まったかの様な光景に浸っていると、「ゴーン、ゴーン、ゴーン…」と、お堂の中に鐘の音が響きわたった。朝のお勤めが始まる様だ。

この真言宗豊山派のお経は、日本仏教会でも一目置かれるくらいの綺麗なハーモニーを奏でる事で有名なのです。『長谷寺』の朝勤で唱えるお経は、私達が唱えている『法華経』の「観世音菩薩普門品第25」も含まれており、共に読誦(どくじゆ)したりもしたが、もっぱら『声明』

（しょうみょう）』といって、仏教では声楽の総称と言われる様に、お経↑文字、1文字の息が長く、節回しがあり、それを150名の僧侶が一同に綺麗なハーモニーを奏でるのだから、感動をおぼえるのも当然である。

そんな『声明』を聞いてみると、自然と目頭が熱くなり、気持ちも落ち着き、目を閉じると、大袈裟ではなく、自分が仏様の世界に座している様な感覚に陥っていききました。「百聞は一見にしかず」、皆様もお参りをすれば、私が何を言わんとしているか、すぐに理解出来ると思います。

豊山派の象徴でもある御紋は、オリピックの様な輪っかが、2つだけ重なっているといった紋様だ。意味するところは、『凡仏一如（ぼんぶついちによ） 陰陽一体（いんよういつたい）』等という事です。「凡」とは欲のある私達人間のこと。「仏」とは欲を滅した仏様のこと。また「陰」とは影、つまり日の当たらない側のこと。「陽」とは日の当たっている側のこと…となる。いずれも両極端が、すなわち1つであるという事を表現しているのです。

これを私達の人生に置き換えてみると、苦しみの中に楽しみが潜んでいたり、何かを得ると、何かを失ったりと、常に表裏が一体であることに気づけるのではないのでしょうか？この宇宙の真理を前に、私達は自分自身の心を整える事が何よりも肝心なのではないでしょうか？悪がいなければ、善も存在しないし、光がなければ、影も出来ないので。宇宙の中で不必要なモノは一切存在しないと受け止める時、グローバル化が進行している現代社会に疑問の声を投げかけざるをえません。グローバル化は、画一化（統一）に向かう傾向があるので、結果的に諸文化の個性を疎外してしまいます。個性の尊重は大切ですが、それぞれの差異（たとえば勝ち組・負け組）ばかりを強調することは、ともすれば関係に溝を生じさせてしまいます。だからこそ、単に尊重するばかりではなく、もう一歩進んで「理解する」事が求められるでしょう。10人10色で、何もかも同じ生き物なんて存在するはずがないのに、生き方の一本化が推し進められている現代社会にストレスが溜まらないはずがないのです。

もう少し、多様性を認めることが出来れば、自分の世界を認め、他者の世

界を認める事が出来るはず。私」と「他者」は、違うからこそ理解しようとし、共感し合う事を求めているのです。その事に気付けば、地に足を付けて人と関わり、自分が為（な）すべき事を見つげながら生きていけるはず。長くなりましたが、『凡仏一如・陰陽一体』とは、そんな宇宙の真理を言い表した表現の1つだという事を、皆様にご紹介させて頂きました。宗派は違えど、仏教の説かんとするところは、『心の解放』というキーワードが根底にあるようです。自分の『心の解放』を探ってみると、自分の置かれている環境が、違った世界に映っているかもしれないよ。そういうところで、今月号の筆を置きたいと思えます。

（詳細説明）

太陽の中にいるという3本足の赤色の鳥。

修験道の主尊。1面3目2臂の相をして、右手に三鈷杵を持ち上げ、左手は剣印で腰にあて、右足をあげた姿をしている。

真成寺本堂にも祀られているが、背面に炎をメラメラ燃やし、顔は鬼の形相、右手に剣を持っている。合掌

次 号 へ 続 く …

副住職 谷川 寛敬